抗議文学の変奏
Richard Wright と James Baldwin の白人主人公の作品

松田卓也

はじめに

Richard Wright と James Baldwin は、白人男性が主人公の小説を 20 世紀半ばにそれぞれ発表している。Wright の *Savage Holiday* (1954)と Baldwin の *Giovanni's Room* (1956)である。*Savage Holiday* はアメリカのニューヨーク市に住む 40 代前半の Erskine Fowler という白人男性を主人公として描いており、もう一方の *Giovanni's Room* はフランスのパリで暮らす 20 代と思しきアメリカ出身の David を語り手としている。作品の舞台や主人公の年齢に関して異なる点は幾つかあるものの、出版年が互いに極めて近いことに加えて、どちらの作品も白人を主人公に据えており、この点でアフリカ系アメリカ文学ではあまり見られない特徴を共有していると言える。Gerald Early や Stephanie Li といった近年の研究者が明らかにしているように、実際には Wright と Baldwin より前にも Zora Neale Hurston、Ann Petry、Chester Himes といった複数の黒人作家たちが白人を主人公にした作品を執筆しているため、Wright と Baldwin がそれを初めて行ったわけではない。しかしながら、彼らの文学者としての高い認知度や二人の個人的に近い関係性にも拘らず、同じように白人男性を主人公とし、同時代に出版されている彼らの作品を一つの論文や本の一章で比較考察している研究は、私が知る限り、アメリカでも日本でも未だない。近年のホワイトネス研究に引きつけながら、Wright と Baldwin の作品で共通して描かれている白人男性の犯罪と罪の意識について考察したい。

ホワイトネスと抗議文学論争

出版当時から比較的最近に至るまで、*Savage Holiday* と *Giovanni's Room* が白人を主人公にしていることはあまり注目されてこなかった。例えば 1991 年に Library of America から出版された 2 冊からなる Wright の作品集に *Savage Holiday* は含まれていない。出版当時のインタビューでは、小説の主人公が白人であることについて尋ねられる度に、Wright と Baldwin は人種とは違うところに関心があったために白人を主人公にしたと、消極的に述べているケースが多い。しかし、Toni Morrison が *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination* (1992) で指摘するように、"The act of enforcing racelessness in literary discourse is itself a racial act" (46) であり、黒人作家による作品であれば人種を切り離して考えることは尚更難しい。さらに Wright は、あるインタビューでは自身が米国からフランスへと移住したことに触れつつ、"I have become concerned about the historical roots and the emotional problems of Western whites which make them aggressive toward colored people…[*In Savage Holiday*], I have attempted to deal with what I consider as the most important problem white people have to face: their moral dilemma" (*Conversations with Richard Wright* 167) と述べている。ここで Wright が言う作品に込めた白人分析の側面は、Baldwin の作品にも当てはまると考えられる。Baldwin は Wright の後を追ってパリに渡った後、"This Morning, This Evening, So Soon"などで、アメリカとフランスにおける人種問題の違いを扱う作品を執筆しており、Baldwin にとっても人種は中心的なテーマであり続けたはずだ。

Wright と Baldwin の両者が同時期に白人主人公の作品を発表していることは、彼らのいわゆる抗議文学論争の文脈ではどのように理解されるべきだろうか。よく知られているように、Baldwin は 1949 年発表のエッセイ "Everybody's Protest Novel" において、Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852)と共に Wright の代表作 *Native Son* (1940)を、芸術性の薄い、政治的な「抗議文学」として批判している。一回り以上離れた年齢差にも拘らず、それまでは親しい関係性だった二人が、この論争によって絶交している。激昂した Wright が、Baldwin に向かって「抗議文学でない文学などない」と言い放ったことは、Wright の死後に書かれた Baldwin のエッセイなどで説明されている。本研究は、そういった少なくとも表面上は個人的な関係が破綻していた彼らの作品の間に文学的な影響関係を見出そうとするものである。*Savage Holiday* と *Giovanni's Room* は、どちらも白人男性の内面、特に彼らの罪の意識を抱えた内面を描写している点で共通している。そして、黒人作家としての視点から、そのような意識を持った白人主人公を描くことで、アメリカという国そのものを描くという創作上の意図も共有しているように思われる。

牢獄のメタファー

Wright と Baldwin の白人主人公は、一般的に想像されるかもしれない様々な特権や自由を享受する白人ではなく、むしろ反対に白人でありながら主流社会から除け者にされた、弱い立場にいる白人である。そして注目すべきことに、どちらの作家も白人の深層心理を描く際に牢獄のメタファーを使用している。*Savage Holiday* では Erskine が長年勤めていた保険会社を突然解雇されるが、その背景には会社の社長が自分の息子に会社を継がせるため、Erskine を辞めさせて彼の地位に息子を就かせるという、Erskine からすれば一方的で理不尽極まりない理由がある。かくして Erskine は 40 代にして無職になるが、その際に語り手は次のように述べる。

> Work had not only given Erskine his livelihood and conferred upon him the approval of his fellowmen; but, above all, it made him a stranger to a part of himself that he feared and wanted never to know. At some point in his childhood he had assumed toward himself the role of a policeman, had accused himself, had hauled himself brutally into the court of his conscience, had arranged himself before the bar of his fears, and had found himself guilty and had, finally and willingly, dragged himself off to serve a sentence of self-imposed labor for life, had locked himself up in a prison-cage of foil (32-33)

主人公にとって保険会社での仕事がいかに重要であったかを表す一説であるが、途中、幼少時代を描くところから裁判や牢獄のメタファーが使用されている。母子家庭で育った Erskine にとって幼少時代は寂しく苦々しいものであり、彼はその孤独という抑圧を意識の深いところにある牢獄の中に閉じ込めていたと語り手は述べる。この後、物語では Erskine の屈折した幼少時代や、さらには物語の現在で彼と同じマンションに住む若い母親 Mabel と彼女の息子 Tony の関係が語られる。最終的に Erskine は Tony の転落死に加担し、Mabel を包丁で刺殺することを踏まえると、上の引用箇所で使われる心理的抑圧のメタファーとしての牢獄は、作品の後半で描かれる主人公の殺人と警察の自首へと繋がる伏線として理解できる。

Giovanni's Room においても牢獄は何度も言及されており、それは主に David が死刑判決を受けた Giovanni に思いを巡らせる際になされている。David は婚約していたアメリカ人女性 Hella に黙って、イタリア人男性 Giovanni と一時の体の関係を持つが彼とは別れる。Giovanni は別の男性と関係を持ち、その後に殺人を犯して死刑判決を受ける。David は Giovanni に気持ちがまだあるため、牢獄にいる元恋人のことを頭の中で思い描いている。そういった中で注目したいのは物語の後半で、David が "The body in the mirror forces me to turn and face it. And I look at my body, which is under sentence of death (…) I long crack that mirror and be free. I look at my sex, my troubling sex, and wonder how it can be redeemed, how I can save it from the knife" (168) と述べる場面である。ここで David は部屋で裸になり、全身鏡に映る自らの男性器を見つめている。これより前の場面では死刑判決を受けた Giovanni が牢獄と結び付けられているのに対し、引用場面では主人公である David が「死刑判決」("sentence of death") を受けている。言い換えれば、David は Giovanni が死刑判決を受けることになった責任の一端が自分にあると強く感じている。最初に Giovanni を同性愛の関係に誘ったのは David であるから、そのことで責任を感じているのだ。作品全体を通して David が Giovanni を弁護したり救済のために声を上げたりすることは一度もないものの、先の引用場面で主人公は Giovanni に対する罪悪感を感じつつ、社会的に認められない自らの男性性を牢獄の中に閉じ込めている。

まとめ

Wright と Baldwin は白人主人公を共感と批判の両方の思いを込めて描いている。白人主人公が共感をもって描かれている背景には、ジェンダーに対する Wright と Baldwin の意識の高まりが観察できる。20 世紀半ばに作品を執筆していた彼らにとって、黒人と白人の人種関係は伝統的な二項対立ではなく、そこに男性と女性というもう一つのアイデンティティの要素が加わり、それが人種的対立項と交錯する。言い換えれば、Wright と Baldwin にとって、黒人男性と白人男性は、人種的には対立しているものの、もう一方で同じ男性であり、その点から男性性を抑圧される、あるいは男性性について思い悩む白人男性が彼らの作品において共感的に描かれることになる。特に Wright の作品で明らかなように、そこにはフロイトの精神分析の影響、つまり幼少期に経験したトラウマがその人の後の人生にも影響を及ぼし続けるという考えが作用している。その一方で、Wright と Baldwin は白人主人公に対して批判的な眼差しを向けてもいる。具体的には *Savage Holiday* と *Giovanni's Room* の両方にアメリカ植民地支配の歴史やネイティブアメリカンに対する言及が含まれている。Wright と Baldwin はアメリカの白人男性が、過去の侵略に対して罪の意識を持ちながらも、男性性や男性的なイメージを死守するために、道徳的な罪を認めようとしない様子や心理を描写している。したがって、*Savage Holiday* や *Giovanni's Room* を論じる先行研究では Wright や Baldwin が「白人」を主人公にしているとしばしば説明されるが、厳密に言えば彼らが描いているのはアメリカの白人であり、そこには黒人作家の視点から米国のホワイトネスを分析的に具象化しようとする意図が表れていると考えられる。このことはまた、Wright と Baldwin の両者が「黒人文学＝抗議文学」という単純な等式を塗り替えるために、白人主人公の作品を執筆したと解釈することもできる。

参考文献

Baldwin, James. *Conversations with James Baldwin*. UP of Mississippi, 1989.
-----. *Giovanni's Room*. 1956. Vintage Books, 2013.
Engles, Tim. *White Male Nostalgia in Contemporary North American Literature.* Palgrave Macmillan, 2018.
Fabre, Michael. *The Unfinished Quest of Richard Wright.* U of Illinois P, 1993.
Li, Stephanie. *Playing in the White: Black Writers, White Subjects*. Oxford UP, 2015.
Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Harvard UP, 1992.
Wright, Richard. *Conversations with Richard Wright*. UP of Mississippi, 1993.
-----. *Savage Holiday*. 1954. UP of Mississippi, 1994.